



新潟の原風景といえば、どこまでも広がる豊かな水田。この景色は、確かに、行き渡る水があって作られています。これは、水と農業、そして新潟の未来を考えるシリーズです。



木原四郎の 水利を歩く in 三条・見附

新潟市在住のイラストレーター木原四郎さんが、刈谷田川右岸地区を支える水の流れを訪ね歩き、風景や人とのふれあいを描いていただきました。

夏空にモクモクと盛り上がる雲、たっぷり雨を飲み込んでうだ。ひと降りくるぞー。
三条市、国道403号線の今井橋から見る
刈谷田川右岸排水機場。
降雨による水位の上昇にともなえ、排水ポンプの稼働が準備される。ここは地域を洪水から守る大切な施設だ。



見附市の刈谷田川土地改良区を訪ね、理事長の河村剛夫さんに会った。事務所の敷地内に建つ完工記念碑の前でお話を聞いた。
石碑には沿革が刻まれ、この地区の水利事業の難渋さがうかがえる。水と土の保全をとおして地域に貢献する……。その思いは強い。



イラストレーター 木原 四郎さん

1946年、佐賀県佐賀市出身。「旅するイラストレーター」として新潟県内を歩き、風景や人物を描き続ける。独特の柔らかいタッチのイラストと心温まる文章で人とモノの出会いを紹介し、人気を集める。17年にわたり、NHK総合「金よう夜 きらっと新潟」に出演した。



水との苦闘重ねた先人 「境界線」を農地に刻む

水盗み 盗まれながら 稲の花 南盆

強湿田地帯だった亀田郷でコメづくりに奮闘した樋口昌平さんの句である。この刈谷田川右岸の農地も、亀田郷と同様に水に苦しめられた土地だ。そうした昔日の農作業を遠景に押しやって、令和元年の蒲原の秋も何とか豊かな実りで刈り上げを迎えた。

ところで、市町村の境界は人が水と土に挑んだ足跡を現代に伝える証人だ。刈谷田川とその右岸の農地には、おびただしい蛇行とカギ型の境界線が走っている。この複雑な境界の痕跡は、この土地を舞台に水との苦闘を重ねた先人が大地に刻み込んだ執念の軌跡のように思える。それだけ利害が複雑に絡み合った上下流の地権者の思惑を調整し、国営事業という統一的な排水体系に結集した土地改良区の役割は大きなものがある。

そうした期待を担って始まった国営刈谷田川右岸排水事業は、17年の歳月をかけて4560㍍を乾田に変えた。とりわけ、毎秒75㍍の排水能力を持つ大排水機場の設置は、さながら農地を守る大魔神のような頼もしさだ。

この事業を契機に、地域の農業構造改革が大きく展開した。第一は、国営事業に並行して始まった全域にわたるほ場整備だ。年次を経るにしたがって標準区画は拡大し、平成以後は1筆当たり最大1㍍となり、近年は自主防災の取り組みとして「田んぼグループ」も広がりを見せている。

第二は、担い手組織の相次ぐ設立と、それに伴う農地集積である。現在、この地域には農業生産法人および営農組合が合計57もあり、生産法人等へ約70%も農地が集積されている。これは県内トップクラスの改革実績だ。

これら組織の中には、2200㍍超の稲作法人や、全国表彰で最高賞を受賞した116㍍の大豆専作組織、さらには、まだ少数ながら高収益園芸作物の導入を図る組織も続いている。

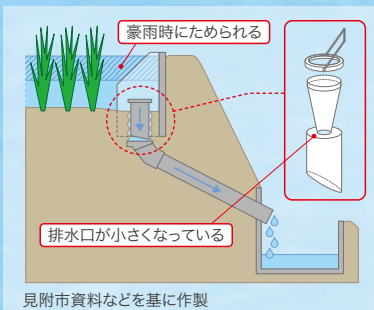
豊かな豊穡の大地に、担い手経営体のたくましい躍動の音が聞こえている。



新潟大学名誉教授
伊藤 忠雄さん

1944年、新発田市生まれ。67年、新潟大学農学部卒。専門は農業経営学。同大教授、副学長などを経て2010年に退職。15年3月まで放送大学新潟学習センター所長。12年から5年間、県内の先進的農業経営者を講師に招き、実践的経営論を議論する「新潟農業経営塾」を主宰。現在、新潟市農業活性化研究センター名誉所長として新潟農業の課題などを問題提起している。





新潟大学と開発した調整管。農家の協力に加え、水位調整の手間を省き、必要な時に効果を上げられるよう改良を重ねています。豪雨で排水が間に合わないような時、装着により田んぼからの排水を80%抑制できるそうです。

※田んぼダムとは… 田んぼが本来持っている「水をためる機能」を生かし、市街地の洪水被害を減らそうとする自主防災の取り組みです。雨水を一時的にため、少しずつ流すことで、排水路の水位上昇を抑えます。

田んぼダム
農

調整管で排水抑制
集中豪雨に備える

貝喰川流域の排水を担う刈谷田川右岸排水機場は、処理能力毎秒約75トンの受益地内の宅地増加に対応するためには、河川を含めた地域の排水の見直しが必要ですが、「これを持つ間に見附市独力でもやれる対策を」と考えられたのが田んぼダムです。

田んぼの排水管に調整管を挿入して排水を抑制することで、いざという時には一時的に田んぼに貯留させ、宅地の排水を優先的に行います。宅地や自動車は数分の冠水で壊滅的な被害を受けますが、田んぼは少し長くても耐えらるからです。対象地域12000畧のうち全ての生産者が協力、新潟大学と調整管や効果の研究を行いました。「2011年の新潟・福島豪

排水良く収量安定
農水大臣賞に輝く

大豆
農



今年、全国大豆経営改善共励会「集団の部」で農林水産大臣賞を受賞した栄北部株式会社。刈谷田川右岸地区の農事組合法人「尾崎泉地区生産組合」など4法人から大豆生産を受託する会社です。ブロックローテーションにより3年に1度、各ほ場で大豆を作付け。大規模な団地にまとまったほ場で、同社が種まきから収穫まで効率的に栽培する仕組みを2001年からスタートしました。こうした取り組みを行う理由は、地域ぐるみでコメの生産調整を行い、大豆作付けによる交付金と合わせて水稲並みの収益を確保していくためです。19年の大豆作付面積は128畧、10畧当りの収量は18年産は全国平均の1.7倍を誇ります。

「刈谷田川右岸排水機場のおかげで冠水してもすぐに水が引くようになった。これがなかったら大豆は作れない。ほ場整備が進んで標準で1区画1畧だから作業効率も良い」。岩坂さんは安定して高収量となる理由として、排水の良さを上げます。大豆栽培に適した土作りも浸透し、収量が増加。受賞はみんなの励みになった」と話します。

取り組みの背景には深刻な後継者不足があり、この手法は所得確保のために見いだした活路です。「集落を維持するため、これからも農業を続けていきたい」と力強く語りました。

排水対策推し進め 地域の暮らしを守る

刈谷田川右岸地区は刈谷田川、信濃川、五十嵐川、貝喰川が交わり、たびたび大水害に襲われてきた地域。水を得るとともに排水が常に課題となっており、刈谷田川右岸排水機場などの施設がなく、農業や地域の食だけでなく、住民の安心・安全にも直結しています。



ただいまーと
農

顔の見える繁盛店
研修通し技術磨く

三条市に2016年オープンしたJAにいがた南蒲の直売所「ただいまーと」は、地域密着の店づくりを目指し1日平均千人を超えるレジ客数を持つ繁盛店。商品供給のおよそ半数を刈谷田川右岸地区の生産者が占めています。

生産者からも「ただいま」と言ってもらえる居心地のいい場所づくりに努めています。営農指導員2人が常駐し、出荷のついでにちよっとした相談もできる上に、豊富な研修メニューもそろえています。山崎哲央課長は「生産者同士の情報交換も盛んで、バックヤードでは、笑い声が絶えない」と言います。

7月上旬には盆花の出荷予定者に

害虫駆除や包装の講習会を開催し、座学と畑の視察を実施。「生育が早すぎる時はどうすればいい?」と質問したり、選ばれる彩りや品種について情報交換したりしていました。

刈谷田川右岸地区は稲作主体の地域ですが、農家の所得拡大のための園芸転換は大きな課題です。山崎課長は「生産者の多くは、個人経営体だが、育苗ハウスを活用した園芸転換など集落営農団体との連携も始まっている。お客さまの顔が見え、少量の生産物でも販売できる直売所は園芸生産の足掛かりとなる」と力を込めました。



支えているのは
刈谷田川・信濃川・
貝喰川の水。

地元のおコメ格別
校区産月替わりで

見附市の給食
食

見附市の小学校は全8校。この4月から、各校で生産されたコメを月ごとに学校給食の米飯として供給しています。10月は今町小学校のコンシカリ、11月は田井小学校のみずほの輝き、12月は葛巻小学校のこしあふくと、市内小中学校など13校の子どもたちは、月ごとに、それぞれの小学校区でできたおいしいおコメを味わっています。

給食に校区産のコメを使う取り組みは、「地元の農家が丹精を込めて作ったコメを子どもたちに食べてほしい」との思いから始まりました。同市農林創生課の福田忠義さんは、「八つの小学校区ごとに生産者を選定し、集荷から精米、給食センターへの直接搬入、炊飯まで一貫して市内で行うのは、全国初では」と胸を張ります。給食米の確保、そして供給の調整役は、一般社

団法人農村振興センターが担っています。同法人は市内の全農業集落を支援する組織で、各地域の農家の実情に精通している団体です。給食センターでは8生産者4品種のコメを受け取ることから炊き方をそのつど変更。7月からは味の違いに興味を持ってもらうため、精米歩合を七分づきから精白にしたことで副菜の栄養バランスも変えました。多くの関係者の尽力で、この新たな供給体制は、従来の給食費の範囲に抑え、同時に地域の農家の所得拡大にも貢献しています。

6月下旬、今町小学校では校区内のコシヒカリが給食に出ていました。子どもたちは「うでで食べているのは県産米だけと、給食は見附のおコメ。今町のおコメはおいしい」とほほ笑みながら食べていました。

刈谷田川右岸排水機場
豪雨時に威力発揮
施設の更新着々と

刈谷田川右岸地域は、越後平野の南部に位置し、信濃川とその支流である刈谷田川、五十嵐川に囲まれ、背後に東山連山を控えた低湿地帯です。

河川は、刈谷田川に代表されるように川幅が狭く流れが急なため、洪水が多く発生しました。また、普段は水が少なく、農業用水として利用するには、十分な量が確保できませんでした。そのためコメの収穫は、度重なる水害と水不足により極めて不安定でした。

1961年8月の集中豪雨をきっかけに地域全体の排水計画が立てられ、国営刈谷田川右岸土地改良事業(70、86年度)により、刈谷田川右岸排水機場が76年、完成しました。

平常時は全て信濃川に自然に排水されますが、洪水時には信濃川の水位が上昇し、地域全体の75%に当たる低い土地で自然排水できません。刈谷田川右岸排水機場のポンプで大量の水を排出することで農地や住宅地、工場など地域全体を水害から守っています。



刈谷田川右岸排水機場

2004年7月、11年7月の豪雨では、昼夜を通しポンプ5台をフル運転し、洪水被害の拡大防止に大きく貢献しました。また、刈谷田川の河川改修に伴い、72年に刈谷田川大堰(おおせき)の改良工事が完成しました。このおかげで川の流れを阻害せず、国営事業で整備された取水施設(三股取水工、昭和江湯水機場)から、必要な農業用水を安定的に確保できるようになりました。

現在、刈谷田川右岸排水機場は完成から約40年が経過し、施設の長寿命化を図っています。昨年度はポンプ(口径21)1台を分解整備。さらに国営施設応急対策事業(16、19年度)として、ポンプ稼働時に必要な特別高圧受電設備の更新と耐震化を進め、本年度完了します。

国営、県営の各事業などで、排水改良や用水整備、ほ場整備による大区画化などが行われたことで、農作業効率が向上し、労働時間の短縮、生産コストの低減が図られました。さらに農地の集積・集約化で担い手の規模拡大も進んでいます。大豆や野菜などを組み合わせた複合的な農業経営が展開されており、収益向上に結びついています。

